

アンダマン海の真珠

プーケットは世界各国から観光客が休暇に訪れる国際リゾート地である。五つ星クラスの豪華なホテルからブティックホテル、ゲストハウスまで約四万軒の宿泊施設がそろっている。島の大きさはシンガポールや淡路島より少し小さいくらいで、島の西海岸の北から南までそれぞれ特徴がある美しいビーチが並んでいる。

官庁街や庶民の暮らしの中心は島の南東部に位置するプーケットタウンだが、観光客にはエンターテインメントなどが充実したパトンビーチが人気がある。

プーケットに暮らす人々の多くはホテル、レストラン、商店など観光業に携わっているため英語がよく通じる。街なかには英語



ソイ・ロマニー（オールドプーケット）

タイ プーケット 補習授業校

●タイ●

校舎



観光の中心パトンビーチ



の看板があふれるなど、プーケットに住む人たちは小さいころから英語に触れる機会を持ち、また英語のみならずさまざまな言語を習得したいという子どもも多くなる。

現地の教育環境

タイの学校は小学校が六年、中等学校（日本の中学・高校）が六年で、そのうち義務教育は小学校の六年間と中等学校の三年生までである。義務教育期間の就学率はもちろん中等学校、六年生卒業後も専門学校、短期大学、大学などへの進学率が高い。

プーケットには国立、市立、私立の小・中等学校と国立大学、短期大学、専門学校がある。私立にはインターナショナルスクールもある。特に校区はなく小学校は希望する学校へ入学できる（一部入学試験実施）。



授業風景

校ではタイ語で授業が行われるが、小学一年生から英語を必須科目として学ぶ。学校の勉強だけでなく放課後や休みの日に、塾、ピアノ、水泳、タイ楽器演奏や舞踊などに通う子どももいて、中学受験をも控えていることから、毎日忙しい日々を過ごしている小学生が多い。職業専門学校では観光業に携わるために長期にわたる会社研修など特別なプログラムが組まれている。

試行錯誤の中から

本校では学齢別のクラスと並行して実力別の漢字クラスを別途編成している。すべての子どもたちに毎月試験を受けさせて、その結果によって二十五級から十段まで三十五段階にクラスを分け、四十分間、漢字学習のみの時間をとっている。「親に言われたから、仕方なく補習校に来ている」と



遠足 島内随一の景勝地ブロンティップ岬にて



授業風景



スクールバス通学風景



授業風景

Phuket Japanese Supplement School

URL <http://www.phuketja.org>

児童生徒数 幼=10人 小=31人 日本語=9人

子どもたちから

ほとんどの日曜日の学校では運動会があったとしても楽しかった。みんな楽しかったと思う。(小3)

糸糸がいっぱいで海が近くてそれな自です。みんながわいわいかかかか勉強します。(小5)

学校で新しい友だちにあっていっしょに勉強するのが楽しいです。(中3)

いった消極的な子でも、この漢字検定に関しては、かなり積極的かつ自発的に取り組んでいる。

「みんなと同じクラスで勉強したい」「一人だけ、取り残されたくない」「ずっと同じクラスだと、カッコ悪い」。子どもたちは子どもたちなりの目的意識を持って取り組んでいるようである。

また、「ひらがな」「カタカナ」「漢字」「拗音」「促音」「濁音」等、覚えねばならない課題が山積み。小学一年の学習を週二回三時間の授業で終わらせることは難しいという現実から、「小学準備クラス(幼稚園年長組対象)」「小一クラス」「小二クラス」の三年をかけて、これらをマスターさせることにしている。

遠足や運動会は、とても楽しい行事にな

っている。特に運動会は、積極的に親子混合種目を取り入れ、家族全員で盛り上がるものになっている。子どもたちがほほすべての種目に出場できるのも、本校のように小さな補習校ならではのメリットである。

保護者と子どもたちが一体となって楽しく運営されている本校ではあるが、もちろん問題点もある。

日泰の国際結婚家庭の子どもたちが多く、日本語のレベルに差が大きいことや、予算と人材の不足から講師の確保が困難なことなどがあげられる。格差のある子どもたちの日本語能力に合ったクラスを編成しようとすれば、どうしてもクラス数が増大してしまう。そしてこれが講師の確保をますます難しくする原因にもなっている。

子どもたちの人生、将来の生活を見据えていくなかで、日本語をどう位置づけていくかは各家庭によって異なるが、それを踏まえたうえで、本校がどうあるべきかを考えていかねばならない。

また、ブーケットの場合、永住を予定していた家族でもテロ、戦争、伝染病、津波などによって観光ビジネスが大きな打撃を受けるたびに、バンコクに移ったり、日本に帰国したりすることが少なくない。親の事情で突然日本に帰ることになってしまった子どもの戸惑いを最小に抑えることができる日本語力、国語力をつけさせたいと考えている。

(二〇〇八年十一月現在)